

顔輪郭傾斜錯視

氏名：安田孝(1)・高木幸子(2)

所属：(1)松山東雲女子大学人文科学部 (2)常磐大学人間科学部

連絡先：yasuda<at>shinonome.ac.jp

作品の解説：

輪郭を模した楕円の中に入れた顔を傾ける（回転させる）と、楕円はまっすぐに正立した状態にもかかわらず、つられて傾いて見える、という錯視です。作品では、左右にそれぞれ15度まで内部の顔を傾けています。内部の顔を傾けた方向に、それぞれ楕円は傾いて見えます。楕円全体を傾けた場合と比較すると傾きは弱いものの、すべて正立の状態と比較すると、傾きが確認できます。

楕円の中に入れた顔が、たまたまそのような効果を生み出す可能性も考えられます。そこで別の顔を当てはめて検証しましたが、同様の現象は確認されます（Matsumoto & Ekman, 1988 より、男性と女性の中立表情を使用しています）。

顔に限らず楕円の中身が傾いていれば同じ現象が生じることも考えられます。そこで、寄せ鍋の画像を配置し傾けてみました。寄せ鍋にした理由は、顔の目や口のように、中の要素（具材）に意味があり識別可能であること、しかし顔の目や鼻と違って決まった配置がないからです。その結果、鍋の画像では、顔の場合のような楕円の傾きは認められません。

顔の内部要素（目や口など）が外部（輪郭）の形状知覚に影響する例として、Lee & Freire (1999)などが報告されています。ただし、これまでに示されているのは上下左右方向への影響であり、今回は傾きに関する現象が見られる点が特徴的であると考えます。

この錯視は、ツェルナー錯視に代表される方位錯視（illusion of orientation）の亜種だと推測されます。しかし、顔という性質が、幾何学的な錯視とは異なる機序にもとづいて錯視を生み出している可能性もあり、新規な錯視であると考えられます。顔の傾きは社会的な意味を持つため、顔の印象形成に関わる研究につながるかもしれません。

引用文献

- Lee, K., & Freire, A. (1999). Effects of configuration change on shape perception : A new illusion. *Perception*, 28, 1217-1226.
- Matsumoto, D., & Ekman, p. (1988). Japanese and Caucasian Facial Expressions of Emotion (JACFEE) and Neutral Faces (JACNeuF) [CD]. San Francisco, CA: Human Interaction Laboratory, University of California.